

## おめでとう一年生・・・その嬉しさと不安

4月に我が家のふたごちゃんが、ようやく、晴れて1年生になった。

「ここまで大変やったね!」とか「ちょっとは楽になった?」と声をかけてもらうことも多かった。

ふたごちゃんが幼稚園に入園するときも同じく声をかけてもらったが、また意味の違うものであった。入園の時には1. 普通のものが食べられる(ミルクだけではない) 2. オムツがとれた という2点が“楽”の意味の90%以上を占めていた。

今回は、実にさまざまな要因に細分化された“楽”である。その中でも、1. 給食 2. 自分の時間 というのがパーセンテージの多く占めるが、それは同時に“喜”や“嬉”にも波及する。ふたごのこどもをお持ちでない方にも、容易に想像してもらえらるだろう。

お兄ちゃんの入学時にはふたごたちの入園も重なり、幼稚園の絵本袋やコップ袋を作りながら、算数セットのひとつひとつにひらがなで名前を記入せよ!という命令に、予測はしていたものの、実物を目にしたときにめまいがして、思わずお金を出して名前シールを注文してしまった。

それがどうだろう。今回、余裕で手書き名前をやってしまった。お兄ちゃんとは3歳ちがいのので、お兄ちゃんの算数セットと新しい算数セットを半分ずつにして、両方の子に半分のお古が入るようにした。中身がゴロツと変わっていたり、箱が小さくなっていたりして、収まりきらなかったらどうしようと危惧していたが、そんなことも起こらず、バラで買い足すこともできるとわかり安心した。

貼ってあるお兄ちゃん名前のシールをひとつひとつはがし、時にはベンジンできれいにし、新たにふたごたちの名前を書いていく作業は、決していっぺんにはできなかったけれど、飽きもせず楽しかった。

「これで1年生の算数セットにこどもの名前を書くのも最後やなあ」とさえ思ったのだ。他のおかあさん方の2倍の作業にもかかわらずだ。申し訳ないが、お兄ちゃんの名前シールを貼る時は「あー、めんどくさい」とばかり思っていた。入学・卒業が重なる3歳違いを理由にしても、この差はヒドイ。今更ながら反省。

こんなにもこの子たちが1年生になるのが嬉しかったんだって改めて思う。それは給食でも自分の時間の確保でもない全体を覆う“嬉”が正体だったんだろうな。

1学期の終わり、個人懇談の短い時間で先生から質問を受けた。

「何か心配事がありますか?」という問いに対する、私の「本当に育児だけに疲れていて、寝る前に本を読む習慣もなかったし、まだひらがなもちゃんと書けないし・・・ちゃんと勉強していけるのかちょっと不安で・・・」という応えに続く、更なる先生からの問いであった。

「おかあさん、今、その辺にいる赤ちゃんとか小さい子供さんを見て、可愛いって思いませんか?」

私は会話の不適切につながりに疑問を抱きながらも、

「はい。うちの子も、もう大きくなると止まっててくれたらいいのに、って時々思います。」

と言った。先生はにっこりされて、こう続けられた。お兄ちゃんの受け持ちの先生は、今まで皆、独身の女の先生だったが、この先生は私より5～6歳年上で3人のお子さんがおられる。

「へー、偉いわ。そう言わはるだけで、おかあさんの子育ては正解ですよ。私もね、今はそう思えるけど、昔は、保育園に迎えに行ってもこっちに来ないで、って思うくらい小さい子がしんどかったんです。」

そして、さらに私を勇気付けてくださった。

「寝る前に本を読んでやらなくても、そばに置いておく動機付けをしてあげれば、いつか本に興味を持てる時期が来ますよ。字は今習っているところだから、一字、一字ていねいに覚えていけばそれでいいんです。」

私が教え、書き順も間違ふことなくひらがなを全部書けたお兄ちゃんとは雲泥の差のふたごたちの知識に、私ははっきりと不安を覚えていた。・・・というより、お兄ちゃんの場合は、そうすることで自分に自信を持っていた。

だが、下のふたごの場合・・・勝手は違った。字に対する興味が起こるのに時間がかかり、ふたりの間に時差と温度差があった。だから、不安が生じたのだ。はじめてのこどもがふたごとして生まれてきたら、私はいったいどうしたのだろうか？必死になって入学前に知識として字を教え込んだり、本を読んでやったりしたのだろうか？

答えは「NO！」

私だってやろうとしたことはあるんだ。でも、同じ年の同じ性別の子をふたり同時に遊び以外のことをさせる、というのが難しかった。自分の右と左にすわらせて、書いてある名前を確認して、各々の鉛筆を持たせるだけで他人の3倍くらい時間がかかった。おまけに、こどもはこれでもか！というくらい鉛筆を床に落とす。すると、2Bの鉛筆の芯はすぐに折れる。たちまち鉛筆削り器の取り合いが始まる・・・。何度も何度も繰り返した。

で、ホトホト疲れたのだ。あきらめの境地に至り、現実を受け入れ、他の家事と天秤に掛けられた末、破れるのだ。あきらめの「あ」が頭をかすった時には、ふたごたちは元の遊びを続けるべく、私のそばを走って離れていくのが常であった。

もうひとつの理由として挙げられるのは、ふたりで遊ばせておくことが楽になったことだ。お兄ちゃんが学校から帰ってくると、たちまちふたごたちはかまわれるので、ややこしいことになるのだが、ふたごたちだけだと、いつの間にか、本当に上手に遊ぶようになっていたのである。

片付けるときに大モメするけれど、それまでは15分に一度のペースで小さなモメ事がある程度で平和な時間が長続きするようになった。彼らにとって重大なトラブルがあり、どちらかが激しく涙するか、怪我をする寸前（不思議なことに“寸前”が神様のようにわか

る) まで私は介入しなかった。ふたりの声を聞いて、ちょっとした幸せを思いながらふたりの気配を感じていた。

そうやって、さしたる勉強をすることなく、ふたりは1年生になった。給食が大好きな1年生がっぺんにふたり出来上がった。給食の献立表を1ヶ月に1枚もらうのがとても楽しみのふたりである。私はメニューの漢字に全部赤いボールペンでふりがなを振り、冷蔵庫に貼っておく。「明日の給食は何かなあ？」とひとりひとり見に行くのが日課である。

典型的な小学一年生がふたりできあがり！まあ、これでいいかっ！